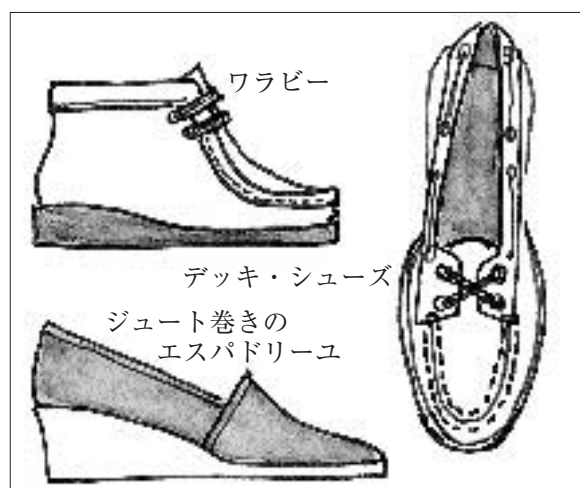


靴のデザインにみる戦後史 ⑤

文・イラスト 神奈川県企業博物館連絡会特別会員 福原 一郎



70年代に登場した民族調のはきものジュート巻きのエスパドリユやデッキシューズ、そしてベロアのブーツ、ワラビーなどは80年代にも引き続いて活躍している。

1980年（昭和55年）若者たちに人気のあったアメリカ東部の伝統的な学生スタイル、アイビー・ルックを基本として、質の良いアパレルを着こなす「プレッピー」スタイルが流行し、靴はトラディショナル調のローファー・シューズやモンク・ストラップ、ジョドパー・ブーツなどが履かれた。

1981年（昭和56年）仕事を持つキャリアウーマンにはニューヨーク・ファッションのクラシックなスーツが好まれ、黒を基調とするものなど、ブランドのブームとなった。

1982年（昭和57年）DC（デザイナーズ・キャラクター）ブランドが盛んになって、ブティックは衣服と靴・雑貨がトータルで並べられ、専属のハウス・マヌカンによって接客販売された。

若い女性の間では、爪先の太い子供靴の

ような「おでこ靴」が流行した。

1983年（昭和58年）靴のJISサイズが制定され、足長と足囲が表示されるようになった。

1984年（昭和59年）足の健康への関心が高まり、シュー・フィッターの養成が始まった。消費者も外反拇趾などに関心を持ち、コンフォート・シューズが履かれるようになった。

1985年（昭和60年）服装は、ボディ・コンシャスといわれる体のラインをそのままに強調するスタイルが打出され、靴は細めで女性らしいロマンティックなデザインのパンプスや、黒とベージュのバイ・カラー（2色コンビ）のデザインなどが履かれた。

1986年（昭和61年）英国のチャールズ皇太子とダイアナ妃が来日、ダイアナ・フィーバーとなる。また、DCブランドの人氣が盛んでブランドブームが続いた。

1987年（昭和62年）エコロジーということが叫ばれ、自然を重視して天然素材の持つ色調が見直され、ブラウン系などのエコロジー・カラーが流行した。

ヤングファッションは低年齢化して、若い男女がカジュアルな服装を身につけた「ストリート・ファッション」が街の盛り場を中心に自然発生的に生まれた。各種のスニーカーやフットベッド型式のサンダルなどが履かれた。

1988年（昭和63年）海外ブランドが目立ち、イタリアの有名品がブームとなった。

1989年（昭和64年）1月7日、昭和天皇崩御、「平成」と改元。11月には東ドイツのベルリンの壁が撤去された。

1980—1989

子供靴のような
婦人靴



おでこ靴



ローファー・シューズ

フットベッド型式の
サンダル



コンフォート・
シューズ



モンク・
ストラップ



ジョドプアー・ブーツ



リボン飾りの
ローヒール・パンプス

ロマンティックな
ハイヒール・パンプス

バイ・カラーの
婦人靴



fuku